

“賛美”の音楽心理学的考察： クリスチャンとノンクリスチャンとでは抱く印象は異なるのか？

後 藤 靖 宏

Yasuhiro GOTO

目次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 謝辞
6. 引用文献

[Abstract]

A Study of Hymns from the Standpoint of the Psychology of Music: Is There a Difference in Impressions of Hymns between Christians and Non-Christians?

Listeners' impressions of hymns were investigated in terms of the psychology of music. Using 40 evaluative words, a questionnaire inquiry was performed for 8 hymns. Five factors were extracted by factor analysis to explain the impressions of hymns: peace, cheeriness, stateliness, loneliness and simpleness. Next, impressions for each factor were compared between Christians and Non-Christians. The result showed significant differences of estimation of cheeriness, stateliness, loneliness and simpleness between Christians and Non-Christians. It is considered that this is because Christians have more opportunities for exposure to hymns in daily life, and that familiarity with hymns is different. In the future, a more precise examination will be needed in order to clarify the difference of impressions for hymns between Christians and Non-Christians in terms of melody and text of hymns.

はじめに

本研究の目的は、“賛美”に対して聴き手が抱く印象の因子構造を明らかにすることである。本研究では特に、クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”に対する印象の違いを詳細に検討することとした。

キリスト教の礼拝や集会では、ほぼ毎回歌を歌う。一般的に「賛美歌」と呼ばれているこうした歌は、神を誉め讃えるという行為そのものであり、キリスト教においては単に“賛美”と称されることも多い(内藤, 2006)。本稿では、そのような慣例にならい、

“賛美”を賛美歌と同義として扱う。

“賛美”については、その目的や様々な精神的意義がキリスト教の観点から論じられている。例えば三谷(1994)は、礼拝における“賛美”の目的として、聖霊を求め、神に対して応答し、神から人へ与えられた恵みへの感謝を表すこととしている。三谷(1994)によれば、この“賛美”は、歌い手が感情を静めて心の目を神に向け、神との交わりを深めていくために必要不可欠なものであるという。また、横坂(1993)は、“賛美”はメッセージを素早く伝える簡潔なものでなければならないと主張している。なぜなら、“賛美”の歌い手は、

キーワード：キリスト教, “賛美”, 聴取印象, クリスチャン, ノンクリスチャン
Key words: Christian Faith, Hymn, Impression, Christian, Non-Christian

曲が終わるまでの限られた時間で、神を誉め讃えたり、神への感謝を表さなければいけないからである。横坂(1993)はさらに、聖書と“賛美”の関係についても言及している。すなわち、聖書は正しい信仰の継承のためには不可欠であり、聖書の御言葉から靈感を得て作られる“賛美”では、歌詞全体に統一感を与える形式が重要となってくるという。

このように、キリスト教の観点からみた“賛美”とは、“賛美”の歌詞に込められたメッセージが重要であり、歌い手に活力を与えるという目的をもつ音楽といえる。それでは、聴き手がこうした“賛美”を聴取した時には、どのような印象を抱くのであろうか。

阿部(1987)によると、人が音を音楽として認知するためには、「体制化」と呼ばれる処理が必須であるという。この「体制化」には、「拍節的体制化」と「調性的体制化」があり、聴き手は、内的な知識や処理の枠組みであるスキーマの束縛や導きを受けて音楽を認知している。楽曲を聴取した際の印象は、こうした体制化の処理の後に感得されていると考えることができる(後藤, 2011)。“賛美”についても、基本的にはこのような体制化の処理を経て音楽として認知されるものであり、体制化の過程の後に印象が得られると考えられる。

これまでに、音楽に対する印象を解明するために様々な研究が行われてきた。例えば、甲斐・市川・新見・岩永(2006)は、音楽の音響的特徴に着目して、これらが聴取印象を規定する要因になるかを検討した。その結果、音高の高さ成分が明暗性に、音の豊かさと音圧の変動成分が力動性に、それぞれ影響を与えており、そうした音楽的特徴を捉えることで音楽の印象を予測できる可能性を示した。また、倉島・金地・畑山(2004)はテンポの変化による印象の変化の検討を行っている。その結果、最も好まれるテンポのときに生じる印象は「明るさ」が最も強く、「くつろぎ」

がそれに続き、「速さ」が最低となっていることが明らかとなった。

このように、音楽に対する印象には様々な要因が関わっていると考えられる。谷口(1995)は、楽曲を聴取した際の印象について体系的に整理している。具体的には、音楽作品の感情価測定尺度(Affective Value Scale of Music; 以下AVSMと略す)を作成することを目的として、西洋調性音楽を用いて音楽に対する印象を調査した。AVSMとは、音楽作品がどのような感情的性格を有しているかという観点から、音楽作品を評価するための尺度である(谷口, 1995)。調査の結果、音楽の印象は、高揚、親和、強さ、軽さ、および荘重の5つの側面に分類できることが明らかになった。

後藤(2011)は、AVSMを参照しながら谷口(1995)と同様の手法で二胡楽曲の印象を調べている。二胡は、中国の伝統的な民族楽器であり、それにより奏でられる音楽は、西洋調性音楽とは異なる音楽体系をもつものである。調査では、二胡の楽曲の印象について検討するため、実際の二胡楽曲を用いて印象を評価させ、因子分析によって聴き手が二胡楽曲に対して抱く印象の構造を明らかにした。その結果、二胡楽曲の印象は、明朗、平安、高尚、悲愴、および情緒の5因子からなること、ならびに悲愴因子は二胡楽曲特有の印象であり、二胡に特徴的なビブラートによって影響を受けていることが明らかになった。後藤(2011)はこの結果について、西洋調性音楽とは異なる調性や拍節構造を持っている二胡楽曲は、一般的な聴き手の認知過程において体制化できる要素としにくい要素が混在している可能性を指摘し、それが谷口(1995)とは異なる二胡楽曲特有の感情を喚起させたと結論づけた。

こうした後藤(2011)の結果を踏まえると、“賛美”もまた特有の感情を喚起させる可能性があり、聴き手はそこに固有の音楽的印象

を感得すると考えられる。“賛美”は、基本的には西洋調性音楽の枠組みに入っており、その聴取印象は原則として谷口（1995）のそれと大きく異ならないと予想される。しかしながら、“賛美”の音楽的特徴という観点から考えると、一般的ないわゆる「賛美歌」に抱かれている印象とは必ずしも同一ではないかもしれない。前述したように、“賛美”とは神を誉め讃えることがその本質であり、そうした条件を満たす楽曲は基本的に全て“賛美”ということになる。例えば、“賛美”の持つ音楽的特徴として、曲に歌詞がついており、曲のテンポも様々であり、ギターで演奏できるようにコードがつけられているなどといったことが挙げられる。讃美歌委員会（1974）所載の楽曲は、一般的にイメージされるようなスローテンポなものだけでなく、テンポにして120bpmのようなアップテンポなものまである。また、ライフ・ミュージック（2002）の楽曲では、全ての曲にコードが記載されており、オルガンやピアノだけでなく、ギターやベースといった様々な楽器で演奏することが可能であることがわかる。さらに、全ての楽曲には歌詞が付されており、“賛美”にとって言葉が極めて重要な要素であることが見て取れる。

以上のように、“賛美”が満たすべき本質的な要素を考えると、一般的にイメージされる「賛美歌」の印象だけではない、別の因子もその印象に関わっていることが予想される。そこで本研究では、後藤（2011）と同様に、“賛美”特有の印象が形成されるのかを明らかにすることとした。

なお、本研究ではさらに、クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”に対する印象についても考察することとした。これは、クリスチャンが日常的に“賛美”に触れていて親近性も高いのに対して、ノンクリスチャンはそうした機会がほとんどなく、結果として両者の“賛美”に抱く印象は同じとは限らない

と考えられるからである。本研究におけるクリスチャンとは、日常的に教会に通って“賛美”に触れており、さらに“賛美”がキリスト教の神を誉め讃える歌であると理解している者と定義し、それ以外の者をノンクリスチャンとした。

以下の調査では、実際に“賛美”を聴取させて印象評価を行わせ、因子分析によって、聴き手が“賛美”に対して抱く印象の構造を明らかにすることとする。

方 法

調査対象者 クリスチャン11名（男性5名、女性6名、平均年齢21.6歳）とノンクリスチャン74名（男性8名、女性66名、平均年齢20.1歳）であった。全員が後述する予備調査に参加していなかった。

材料 楽曲を収集するにあたり、大学生を対象に、賛美歌とはどのようなものであると考えるかを自由記述で回答させた。その結果、「ゆっくりとした曲調」や「オルガンで演奏している」、あるいは「女性の声のイメージ」などといった回答が得られた。こうした内容を参考にし、既存の楽曲から、ノンクリスチャンが聞いて“賛美”らしいと感じる楽曲と、ノンクリスチャンが聞いて“賛美”らしいとは感じない楽曲を、それぞれ10ずつ選出した。これらの曲はいずれも、ノンクリスチャンにとって既知度が低いと考えられるものであった。楽曲の長さは2分30秒から3分30秒であった。次に、本調査に参加しないノンクリスチャンの大学生5名に対してこれらの曲を聴取させ、それぞれの曲が“賛美”らしいと感じるかどうかを7段階で評定させた。さらに、クリスチャンにとっても既知度の低い楽曲であるのかを確かめるため、本調査に参加しないクリスチャンの大学生3名に曲の既知・未知を評価させた。その集計結果に基づき、“賛美”らしいと感じる楽曲4曲、“賛美”

表 1. 本調査で使用了楽曲

曲名	曲の長さ	収録アルバム	編
千歳の岩よ	2分57秒	讃美歌100選第1集よろこびたえよ	ビクターエンタテインメント
十字架のうえに	3分18秒	讃美歌100選第1集よろこびたえよ	ビクターエンタテインメント
光の子になるために	3分3秒	讃美歌21CD シリーズ (全10巻) きよしこの夜	ビクターエンタテインメント
喜びはむねに	3分21秒	讃美歌21CD シリーズ (全10巻) きよしこの夜	ビクターエンタテインメント
恐れない	2分45秒	HOSANNA!	ミクタムレコード
激しい流れのように	2分55秒	HOSANNA!	ミクタムレコード
主の栄光宮に	3分1秒	I WORSHIP YOU	ミクタムレコード
尊きわが主	3分4秒	I WORSHIP YOU	ミクタムレコード

らしいとは感じない楽曲 4 曲を本調査に用いることとした (表 1)。

質問紙 まず、谷口 (1995) の AVSM から 24 語、河村・杉原・森本・黒川 (2003) と杉原・森本・黒川 (2001) の印象を表す評価語から、それぞれ 64 語と 112 語を選出した。これらの中で全く同じ項目を省いたところ、評価語は合計 122 語となった。次に、本調査には参加しない大学生 6 名に対して楽曲を聴取させ、122 語の評価語が、楽曲に対する印象を評価する語として必要であるかを尋ねた。その集計結果に基づき、半数以上が必要であると判断した評価語 51 語を選出した。その後、項目の内容を検討し、類似した項目の一方を削除した。この過程は著者を含む 3 名によって行った。この結果に基づき、評価語 40 語を本調査で用いることとした (表 2)。

質問紙は、表紙、40 語の評価語、曲の既知未知を回答させる項目、および評価終了後の質問で構成した。評定には 7 件法 (1 : 全く当てはまらない ~ 7 : 非常に当てはまる) を用いた。40 語の評価語の後には、楽曲の既知未知を回答させる項目を設けた。最終ページには、クリスチャンであるか、教会に通っているか、通っている場合は教会名と教会で歌っている“賛美”はどのようなものであるか、過去に、キリスト教系の学校に通っていたか、通っていた場合は学校でどのような“賛美”を歌っていたか、および本調査で楽曲のどこに注目していたかを問う質問項目を載せた。最後の質問については、「楽器」、「声」、「メロディー」、「ハーモニー」、「リズム」、「歌

表 2. 本調査で使用了評価語

おごそかな	重厚な
スローテンポな	明るい
シンプルな	迫力のある
雄大な	おだやかな
生き生きした	力強い
躍動感のある	アップテンポな
ここちよい	神秘的な
暗い	おとなしい
ゆったりした	安らぐ
ぬくもりのある	重量感のある
単調な	優しい
強い	さわやかな
軽快な	感動的な
しなやかな	あたたかい
ドラマティックな	透きとおった
のんびりした	情熱的な
素朴な	気高い
沈んだ	切ない
悲しい	落ち着いた
静かな	しんみりとした

詞」、「曲の全体的な雰囲気」、および「その他」の中から複数回答で回答させた。最後に、“賛美歌”の印象やイメージについて自由に記入する欄を設けた。なお、順序効果を防ぐため、40 語の評価語の順序をランダムにした質問紙を 3 種類用意した。

装置 mp3 プレーヤー (Sony NW-S644)、アンプ内蔵スピーカー (Sony SRS-Z1) を用いて楽曲を再生した。

手続き 調査は、騒音のない静かな部屋で、1 ~ 9 名のグループで行った。はじめに、表紙に年齢、性別を記入させ、楽曲に対する印象を調査するものであることを説明した。楽曲は全部で 8 曲あり、評価はその曲ごとに行うこともあわせて伝えた。さらに、曲の途

中で調査者が評価開始の合図を出すことを伝え、合図があったら評価を開始することを教示した。次に、本調査では使用しない楽曲を練習試行として流し、実際の調査の手順を練習させた。練習の後、音量が適しているかを尋ね、必要に応じて音量の調節を行った。最後に手順について不明な点がないかどうか確認した。

本試行では、楽曲を流す直前に、何曲目であるかを被験者に伝えた。評価は被験者のペースで行わせた。評価開始の合図は、ワンコーラスを聴取した後に出した。ワンコーラスは曲の冒頭45秒から1分10秒であった。順序効果を防ぐため、楽曲の呈示はランダムに行った。8曲分の評価が終わった後、7問の質問項目の回答をさせ、調査を終了した。

結 果

被験者1名あたり8曲の音楽刺激について回答しているため、総データ数は680個（85名×8曲）であった。各評定項目の欠損値については、平均値を置換して分析した。

まず、40項目の評価語について、因子分析（主因子法、バリマックス回転、固有値1以上）を行った。その結果、固有値が1.0以上の基準で5因子が抽出された。結果の因子パターンを因子負荷量の高い項目順に示した（表3）。

第1因子は、「優しい」、「こちよい」、「ぬくもりのある」、「おだやかな」あるいは「あたたかい」など、平安で穏やかなさまを表す項目が含まれていた。このことから、第1因子を平穏因子と名付けた。第1因子の寄与率は22.39%であった。

第2因子は、「アップテンポな」、「躍動感のある」、「軽快な」あるいは「生き生きした」など、元気がいいさまを表す項目が含まれていた。このことから、第2因子を快活因子と名付けた。第2因子の寄与率は12.55%であっ

た。

第3因子は、「重厚な」、「重量感のある」、「迫力のある」あるいは「力強い」など、重々しく厳かなさまを表す項目が含まれていた。このことから、第3因子を荘厳因子と名付けた。第3因子の寄与率は10.79%であった。

第4因子は、「悲しい」、「沈んだ」、「暗い」あるいは「切ない」など悲しく物寂しいさまを表す項目が含まれていた。このことから、第4因子を寂寞因子と名付けた。第4因子の寄与率は8.07%であった。

第5因子は、「単調な」、「シンプルな」あるいは「素朴な」など、単純なさまを表す項目が含まれていた。このことから、第5因子を単純因子と名付けた。第5因子の寄与率は4.120%であった。以上の5つの因子の累積寄与率は57.92%であった。

次に、因子ごとにクリスチャンとノンクリスチャンの比較を行うこととした。本研究で得られたクリスチャンのデータは11人分であり、統計的検定には必ずしも十分な数とはいえない。しかしながら、両者の比較を行うことで全体的な傾向を見出すことは、今後の研究にとって意義のあることだと考えられる。因子ごとに対応のないt検定を行った結果、平穏因子においてはクリスチャン（ $M=4.53$ ）とノンクリスチャン（ $M=4.46$ ）との間に有意差はみられなかった（ $t[10878]=1.441, n.s.$ ）。一方、それ以外の因子については、全て両者の間に有意差が観察された。

まず、快活因子においては、クリスチャン（ $M=3.98$ ）とノンクリスチャン（ $M=3.61$ ）との間に有意差がみられた（ $t[942.2]=5.075, p<.001$ ）。また、荘厳因子においても、クリスチャン（ $M=4.82$ ）とノンクリスチャン（ $M=4.18$ ）との間に有意差がみられた（ $t[948.0]=8.752, p<.001$ ）。さらに、寂寞因子においても、クリスチャン（ $M=2.11$ ）とノンクリスチャン（ $M=2.86$ ）との間に有意差がみられた（ $t[636.4]=-9.857, p<.001$ ）。そ

表 3. “賛美”に対する印象を説明する因子構造

項目	平穏因子	快活因子	荘厳因子	寂寞因子	単純因子	共通性
優しい	.836	-.123	-.054	-.034	.078	.724
こちよい	.819	-.034	.071	-.047	.047	.681
ぬくもりのある	.797	-.151	.114	-.011	.088	.679
おだやかな	.779	-.388	.029	.094	.198	.806
あたたかい	.775	.000	.043	-.133	.018	.621
ゆったりした	.728	-.472	.112	.132	.162	.809
透きとおった	.714	.041	.042	.076	.023	.519
落ち着いた	.700	-.442	.075	.116	.230	.756
しなやかな	.640	-.013	-.006	.056	.128	.429
感動的な	.627	.107	.277	.113	-.075	.500
スローテンポな	.605	-.543	.180	.163	.198	.759
のんびりした	.603	-.376	-.020	.177	.306	.630
おとなしい	.598	-.370	-.038	.242	.277	.631
安らぐ	.541	-.090	.087	.063	.029	.313
静かな	.540	-.470	.077	.252	.193	.620
神秘的な	.463	-.165	.333	.284	-.112	.445
アップテンポな	-.523	.695	-.156	-.116	-.025	.795
躍動感のある	-.308	.693	.091	-.105	-.099	.605
軽快な	-.299	.682	-.341	-.158	.094	.704
生き生きした	-.060	.665	.085	-.250	-.023	.515
情熱的な	-.254	.573	.346	-.054	-.012	.516
明るい	.160	.525	-.175	-.389	.148	.505
ドラマティックな	.087	.447	.264	.082	-.004	.284
さわやかな	.306	.429	-.334	-.186	.197	.462
重厚な	.191	-.144	.754	.191	-.097	.659
重量感のある	.166	-.098	.725	.165	-.154	.614
迫力のある	-.139	.320	.713	.079	-.061	.640
力強い	-.169	.405	.656	-.043	.108	.637
強い	-.180	.463	.612	-.010	.083	.629
おごそかな	.237	-.265	.611	.174	-.091	.538
雄大な	.459	-.108	.592	.067	-.036	.579
気高い	.302	.011	.555	.142	.005	.420
悲しい	-.001	-.068	.069	.791	.024	.636
沈んだ	-.035	-.083	.203	.711	.014	.556
暗い	-.068	-.158	.173	.710	.087	.572
切ない	.300	-.066	.043	.644	.062	.515
しみりとした	.315	-.233	.092	.603	.131	.543
単調な	.006	.022	-.102	.109	.645	.438
シンプルな	.242	.045	.002	-.026	.623	.450
素朴な	.344	-.145	-.158	.135	.502	.434
固有値	8.957	5.021	4.314	3.227	1.648	
寄与率 (%)	22.39	12.55	10.79	8.07	4.12	57.92

して、単純因子においても、クリスチャン ($M=3.72$) とノンクリスチャン ($M=4.08$) との間に有意差がみられた ($t [333.3] = -3.158$, $p < .01$)。因子ごとのクリスチャンとノンクリスチャンの平均値を図 1 に示した。

考 察

本研究では、“賛美”に対して聴き手が抱く印象の構造を解明することを目的とし、実際に“賛美”を聴取させ、聴き手が抱く印象の因子構造を明らかにした。また、明らかに

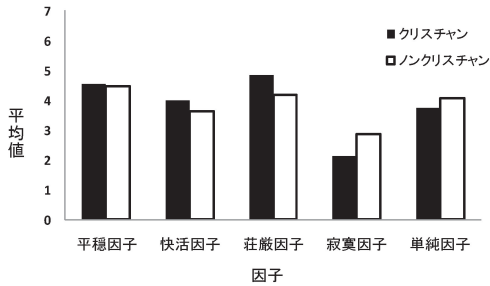


図1. 因子ごとのクリスチャンとノンクリスチャンの比較

された因子ごとに、クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”に対する印象を比較した。

まず、因子分析の結果について述べる。累積寄与率は57.92%であった。抽出された因子は、平穏因子、快活因子、荘厳因子、寂寞因子、および単純因子の5因子であった。

第1因子は平穏因子であった。この因子には、「優しい」や「こちよい」などの項目が含まれており、計16項目で構成されていた。つまり“賛美”の印象には、このような言葉で表現されるような、おだやかでこちよい一面があるといえる。このことから、“賛美”にはおだやかで、安らぎを与えるという一面が、そのもっとも基本的な要素として含まれていると考えられる。また、このような印象は、いわゆる「賛美歌」に対して抱かれている一般的なイメージとも合致しており、それが22%を超える寄与率の一因であろう。

第2因子は快活因子であった。この因子には、「アップテンポな」や「躍動感のある」などの項目が含まれており、計8項目で構成されていた。このことから、“賛美”の印象には、明るく生き生きとしたものという一面があることがわかった。つまり、“賛美”には、先に述べたようなおだやかで安らぎを与えるという側面がある一方で、明るく生き生きとした要素も同時に含まれていると考えられる。このことから、明るく軽快なさまを表す快活因子が第2因子として現れたと考えられる。

第3因子は荘厳因子であった。この因子に

は、「重厚な」や「重量感のある」などの項目が含まれており、計8項目で構成されていた。このことは、“賛美”の印象には、重々しく気高いといった一面もあることを示している。すなわち“賛美”は、神を誉め讃えることがその本質であるため、神を讃えるおごそかさという要素が含まれていると考えられる。このことから、おごそかで雄大なさまを表す荘厳因子が第3因子として現れたと考えられる。

第4因子は寂寞因子であった。この因子には、「悲しい」や「沈んだ」などの項目が含まれており、計5項目で構成されている。このことから、“賛美”の印象は、暗く沈んだものという一面もあることがわかった。つまり、“賛美”には、先に述べたような要素に加え、暗くしんみりとした要素も含まれていると考えられる。悲しく暗いさまを表す寂寞因子が第4因子として現れたのはこうした理由によるのであろう。

第5因子は単純因子であった。この因子には、「単調な」や「シンプルな」などの項目が含まれており、計3項目で構成されている。“賛美”は、同じメロディーの繰り返しが多く、また歌詞も分かりやすく端的なものが多い。このようなシンプルさや素朴さから、単調さや素朴さを表す単純因子が第5因子として現れたと考えられる。

以上のように“賛美”というものの印象は、こうした異なる5つの側面から形成されており、聴き手はそれを認知していると考えられる。そして、この次元の異なる5つの要素を同時に持っていることが、“賛美”の印象の本質であるといえるのかもしれない。こうした結果は、いわゆる「賛美歌」に対して一般的に抱かれている印象とは必ずしも一致しない。特に、第2因子である快活因子は、一般的なイメージとは大きく異なったものであると考えられる。また、一般的な西洋調性音楽を対象としたAVSMの結果と比較すると、

印象は部分的に異なっていた。例えば、本研究では第 1 因子として平穏因子が抽出されたのに対し、AVSMでは、「優しい」、「静かな」といった、本研究の平穏因子と類似した項目を持つ親和因子は第 2 因子として抽出されている。このような結果は、おだやかで安らぎを与えるような要素が“賛美”の基本的な印象であり、一般的な西洋調性音楽とは異なっているためであると考えられる。また、本研究では荘厳因子が第 3 因子として抽出された。しかし、AVSMでは、それと類似した項目を持つ荘重因子が第 5 因子として抽出されている。これは、“賛美”は神を誉め讃えることがその本質であるため、一般的な西洋調性音楽に比べて、より強くおごそかで気高い印象が抱かれたためであると考えられる。以上のように、“賛美”は西洋調性音楽の枠組みに入っているものの、それを聴取した際の印象は西洋調性音楽のそれとは完全には一致しなかった。したがって、“賛美”の印象は、ある程度固有の因子構造をもっていると結論づけてよいであろう。

次に、因子ごとのクリスチャンとノンクリスチャンの比較について述べる。前述したように、クリスチャンのデータは必ずしも十分でないものの、ある一定の傾向を見て取ることができた。

第 1 因子である平穏因子において、クリスチャンとノンクリスチャンとの間に差はみられなかった。これは、“賛美”のゆったりとしたテンポや、静かで透き通ったメロディーやハーモニーが、クリスチャンとノンクリスチャンの両者に、相違なく認知されたことを示している。本研究では、“賛美”がキリスト教の神を誉め讃える歌であり、神との交わりを深めていくという理解をしているものをクリスチャンと定義し、ノンクリスチャンと明確に区別していた。こうした“賛美”に対する認識の違いにも関わらず、平穏因子においては両者の差がみられなかったことから、

“賛美”の優しさやこちよさは、“賛美”の最も基本的な印象の要素であり、全ての人に認知されるものであると考えられる。そのため、クリスチャン、ノンクリスチャンに関わらず、等しく認知されたのであろう。

一方、第 2 因子から第 5 因子については、クリスチャンとノンクリスチャンの評価の間に違いがみられた。まず、第 2 因子の快活因子においては、クリスチャンの方がノンクリスチャンよりも高く評価した。これは、ノンクリスチャンに比べてクリスチャンの方が、“賛美”から明るく生き生きしたさまを感じ取ったためであろう。先に述べたように、クリスチャンにとって“賛美”とは、神から人へ与えられた恵みへの感謝を表すためなどに用いられるとされている（三谷，1994）。このような認識をしているクリスチャンは、“賛美”を聴取した際に、単に音楽から受ける印象のみではなく、本来持っている“賛美”というものが持つ意味などを想起したのかもしれない。それに対し、ノンクリスチャンは、楽曲の“明るさ”や“軽快さ”といったように、単に音楽のみから受ける印象で評価したため、クリスチャンに比べると、明るく生き生きとしたさまを感じ取らなかったのであろう。このことによって、クリスチャンとノンクリスチャンの、“賛美”に対する印象が異なったと考えられる。

また、第 3 因子である荘厳因子においても、クリスチャンの方がノンクリスチャンよりも高く評価していた。これは、両者では“賛美”の重要さや意義づけが異なっているために、評価に差が生じたと考えられる。クリスチャンにとって“賛美”とは、神を誉め讃えるためにも用いられるものである（内藤，2006）。そのため、“賛美”を聴取した際に、そのような神に対する思いを想起し、その結果として、ノンクリスチャンに比べて、“賛美”からより強く荘厳な印象を抱いたと考えられる。

第4因子と第5因子についても、クリスチャンとノンクリスチャンの評価の間に違いがあった。しかしながら、第2因子や第3因子とは逆に、いずれもノンクリスチャンの方が高く評価していた。

第4因子である寂寞因子において両者に差がみられたのは、クリスチャンに比べてノンクリスチャンの方が、“賛美”から、より悲しく暗い印象を感じ取ったためであろう。“賛美”の中には、短調で男性がゆったりと歌った曲も多く存在した。ノンクリスチャンは、単に楽曲のそうした“暗さ”や“寂しさ”という表層的な側面にだけ特化して評価した。それに対して、クリスチャンは“暗い印象”の中に潜む精神的意味を見だし、単なる“暗さ”や“寂しさ”などとは違った次元の印象を感得したのであろう。このように、クリスチャンとノンクリスチャンが本来持っている“賛美”というものの印象が、聴取印象にも影響をあたえたと考えられる。

第5因子である単純因子においても、クリスチャンとノンクリスチャンとの間に差がみられた。本研究の結果から結論を出すことは難しい。“賛美”は一般的に聴取されることの多い音楽に比べて、メロディーが単純であったり、短いフレーズが繰り返されたりすることが多い。こうした特徴に対して、両者の間でその評価が異なったのは、クリスチャンはこのような単調さの中に、何か特別な要素を見いだしたからなのかもしれない。あるいは、クリスチャンは日常的に“賛美”を聴取しているため、その単調さに慣れ親しんでいるからという可能性もある。いずれにしても、単純因子に関するクリスチャンとノンクリスチャンの比較については、更なる検討が必要であろう。

本研究の結果から、“賛美”に対して聴き手が抱く印象は、主に5つの側面で構成されていることがわかった。前述のように、“賛美”には、ゆったりと静かでスローテンポな

曲もあれば、生き生きと元気でアップテンポな曲もある。また、オルガンなどの楽器を用いたおごそかな雰囲気のある曲や、短調で暗い雰囲気の曲など様々な曲がある。それに加えて、神を讃えたり、神への感謝を伝えたりする歌詞も存在する。このような“賛美”の多様性によって、おだやかで優しい印象や、明るく生き生きした印象、重々しくおごそかな印象などを抱いたと考えられる。また、日常的に“賛美”に触れており、“賛美”というものを正しく認識しているクリスチャンと、日常的に“賛美”に触れる機会が少なく、“賛美”に対して漠然としたイメージしか持っていないと考えられるノンクリスチャンとでは、“賛美”に対して異なった印象を持つ可能性があることも示された。両者の違いは、“賛美”に対してより明確な目的や精神的意義を持っている点にあることを考えると、“賛美”が持つ目的や意義の認識が異なることによって、“賛美”を聴取した際の印象も異なってくるといえる。

今回の調査では、クリスチャンとノンクリスチャン両者を対象として、“賛美”の印象構造を総合的に検討した。今後は、調査を継続してデータを増やすことより、さらに安定した結果が得られるであろう。また、“賛美”の曲調や歌詞といった部分に着目し、クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”に対する印象の共通点や違いについてより詳細な検討を行うことが重要であろう。さらに本調査では、“賛美”の印象が、谷口（1995）のAVSMの結果とおだやかで安らぎを与えるような要素や、おごそかさといった点において異なっているということが明らかになった。そのため、“賛美”の印象と、一般的な西洋調性音楽との印象の違いに着目し、“賛美”のどのような要素が、このような違いを生じさせているのかということを明らかにすることも重要であろう。

謝 辞

本研究は、吉田真実（北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科2013年3月卒業）の多大なる協力を得た。記して謝意を示す。

引用文献

- 阿部純一 (1987). 旋律はいかに処理されるか. 波多野誼余夫 (編), *音楽と認知*. 東京: 東京大学出版会. pp.41-68.
- 後藤靖宏 (2011). 二胡楽曲の印象の胡因子構造及びビブラートとテンポの影響. *日本認知心理学会第9回大会発表論文集*, p.98.
- 甲斐真琴・市川周平・新見真侑子・岩永誠 (2006). 音楽の音響的特徴が、音楽に対する印象に及ぼす影響. *広島大学大学院総合科学研究科紀要 I 人間科学研究*, 1, pp.27-37.
- 河村知典・杉原太郎・森本一成・黒川隆夫 (2003). 音楽から受ける印象の評価語に関する検討. *Dynamics & Design Conference, 2003*, pp. "733-1" - "733-5".
- 倉島研・金地美知彦・畑山俊輝 (2004). 楽曲の印象と好みに与えるテンポの影響. *情報処理学会研究報告 (音楽情報科学)*, 111, pp. 125-130.
- ライフ・ミュージック (2002). *LYRE SONG BOOK*. 東京: いのちのことば社.
- ミクタムレコード (編) (1992a). *HOSANNA! / ホザナ!* [CD].
- ミクタムレコード (編) (1992b). *I WORSHIP YOU / アイワーシップユー* [CD].
- 三谷和司 (1994). *賛美の回復*. 東京: キリスト新聞社.
- 内藤みち (2006). 賛美歌を歌い霊性を生み高めるために (上). *聖学院大学論叢*, 18 (3), pp.265-287.
- 讃美歌委員会 (1974). *讃美歌・讃美歌第二編 B6判*. 東京: 日本基督教団出版局.
- 杉原太郎・森本一成・黒川隆夫 (2001). SD法を通してみた音楽に対する感性の基本特性. *映像情報メディア学会技術報告*, 25 (48), pp.57-63.
- 谷口高士 (1995). 音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情状態尺度との関連の検討. *心理学研究*, 65 (6), pp.463-470.

- ビクターエンタテインメント (編) (1996). *讃美歌100選第1集よろこびたたえよ* [CD].
- ビクターエンタテインメント K.K. (編) (2011). *讃美歌21CD シリーズ (全10巻) きよしこの夜* [CD].
- 横坂康彦 (1993). *教会音楽史と賛美歌学*. 東京: 日本基督教団出版局.